

# アルツハイマー 病新薬開発と母 の情景

京都大学大学院薬学研究所

客員教授

すぎもとはちろう  
杉本八郎

ピーチに入ることが出来ず壇上でうろろしていた。この感激のシーンを生涯私は忘れないだろう。

祝宴がすべて終わってホテルに帰り疲れた体をベッドにもぐりこませて寝ようと試みたが興奮冷めやらず寝つくことが出来なかった。そしてなぜか涙が流れて止まらなかった。

やがて毛布をかぶって大声で泣いた。

私は9人兄弟姉妹

の8番目で八郎

と名づけられた。

昭和17年の生まれ

である。戦後の貧

しい混乱の時代に

母は驚くほどのバ

イタリティーで8人

(ひとりはずでに亡くなっていたの

で)の子供を育ててくれた。私は母

の貧しい家計をやりくりしている姿

を毎日見て育った。こんなに過酷な

女性の人生があつていいものかと自

問した。私は人生を呪った。そして

自分に誓った。「必ず将来世界一の

親孝行をするぞ」と。

そして私の生活が安定してきた30

代になってやっとこれから親孝行ができると思つたときに母は痴呆症になった。

これは私にはまたしても人生を呪う材料であつた。「こんな母の人生は絶対認めない」と。私が母を訪問すると母は「あなたさん誰ですか」と尋ねるのだ。私が「あなたの子供

の八郎ですよ」と言うと、母は「あ

あ、そうですか

私にも八郎とい

う子供がいます

よ」。これが親子

の会話であつた。

私は自分に誓った。

「よし、必ず痴呆

症の薬を開発す

るぞ」

エーザイの筑波研究所でアルツハ

イマー病の研究に着手したのは昭和

58年であつた。患者は脳内の神経伝

達物質であるアセチルコリンが異常

に低下するという。私達はこの「コ

リン仮説」をよりどころとして4年

の歳月をかけて1000化合物を合

成した。その中から選ばれたのがア

リセプトである。当初はアセチルコリンを増やしても農薬にはなるが薬にはならないと反対され相手にされなかつた。しかし幾多の困難を乗り越えてさらに10年の歳月を経てようやく平成8年11月に米国で承認された。

いま全世界では約60カ国でアルツハイマー病治療薬として承認発売されている。アリセプトの売上げはエーザイの全売上げの3割近くを占めている。新薬の開発は世界的にみても困難を極めている。しかしその開発品が成功すれば容易に1000億円規模の商品になる。これがファーマドリームと言われる所以である。私の場合は会社のドリームと自分の夢が重なつた極めて恵まれた例であろう。

私がアトランタのホテルで毛布をかぶって泣いたのは、母にたいしての深甚なる感謝の気持ちであつた。

(昭和44年理工学部卒。「アリセプト」の研究開発で「薬のノーベル賞」といわれる英ガリアン賞特別賞を受賞

昨年エーザイを定年退職し現職)

